

剣とペリカン

私は大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出すと、目を見開いた。

私の目の前には広大な平野が広がっている。エインセル……人そっくりに作られたアンドロイドが戦闘の訓練をするために用意された広大な敷地の真ん中に私は立っていた。

腰に刀を差し、袴のような服装を身にまとった私は端から見れば侍だ。けれど私の腰から背中にかけてバーニヤとブースター、滑空用の翼が格納されている。私もエインセルの一人なのだ。

「良いわ、始めてちょうだい」

その言葉と同時に私の視界の隅に表示されているレーダーに赤い点が多数表示される。全員グレムリンと呼ばれる訓練用の自律ロボットで、私はこれからこのグレムリン達を相手に一人で戦わなければならない。

ロボットといっても見た目は人型をしており、私たちエインセルが使うような道具も使うことができる。ただし、私たちエインセルのように意志を持たず、決められたプログラムに従って行動をする。

一、二、三……全部で十体。一人で相手をするには多い数だけど、今の私の敵ではないはず。

「用意……はじめっ」

チームリーダーである睦月の掛け声と同時に、赤い点がこっちに向かって動き出す。私も遙か前方にいるであろうグレムリンに向かって駆け出した。

助走をつけて前方に飛び上がると、肩の後ろにあるバーニヤを噴かし、背中に折り畳まれている小型の翼を開いた。

そうすると着地することなく、地面すれすれを滞空しながら猛スピードでグレムリンに向かって突っ込んでいく。赤い点が急速にレーダーの中心に近寄ってくるのを視界の隅で確認しながら、頃合いを見計らって左右の腰に納められている筒を握った。両手を翼のように左右に広げると、青い刀身がすうっと音もなく伸びた。訓練用に作られた仮想の刀身だ。

いよいよグレムリンが視認できる距離に近づくと、私は一瞬だけ主翼を上に向けてからバーニヤと翼をパージした。

バーニヤと翼はそのまま高度を上げて上空へと飛び去り、その翼めがけて四方八方から数多くのオレンジ色をした点が高速で飛んでいく。

グレムリンがアサルトライフルを撃ったのだ。そして仮想の弾が翼にたくさんぶつかって小さく弾ける。

仮想の弾なので実際に壊れることはないが、コンピュータが衝撃やダメージを計算し、その結果が動作に影響を受ける。翼はゆっくりと右斜めに傾き、やが

て地面に軟着陸した。

さて、私はそんな主翼ユニットがオレンジ色の集中砲火を受けている時にはグレムリンに対して半身になって着地し、両足で地面を擦ってブレーキをかけながらさらにグレムリンへと近づく。もう彼らとの距離は目と鼻の先にまで近づいていた。

まだ十分なスピードが乗っている状態で、左手の刀を大きく横に振ってグレムリンに斬りかかった。

刀の衝撃を受けながら、今度は右足で地面を強く蹴り、走りながら体を半回転させて右手に持った刀で正面のグレムリンの胸を突いた。

「二人目っ」

腕にぐっと衝撃を受ける。グレムリンの放ったオレンジの光が仮装の弾であるように、私が両手に握っている青色の刀身を持つこの刀も仮装の刀なのだ。この実質筒でしかない刀には空気の吹き出し口が数多く空いており、この刀で斬りかかったり突いたりすると、即座にコンピュータが衝撃や反動を計算し、特定の吹き出し口からコンピュータがはじき出した反動と同じくらいの力が加わるように勢いよく空気が吹き出すようになっている。お陰で自分以外の全てが仮装でありながら現実にかかなり近い状態で戦闘訓練ができるようになっていた。左右にいるグレムリンが私に向かって銃を構えるのを視界の隅でとらえながら、右腕を引き抜いて軽く後ろに跳躍。空中で一回転して地面を踏みしめる。さっきまで私が居たところにオレンジの閃光が複数飛び交い、地面に当たった閃光が小さく炸裂していた。

レーダーの表示では左に六人、右に二人。ブースターを使って右へ跳躍すると、体を回転させながら並んで立っているグレムリンのうち、右側の方の背後に回り込む。そのまま左側にいたグレムリンの腕を下から上へ右手の刀で撫でるように斬り上げた。

腕を斬られた……正確には斬れていないけれど、仮想的に腕を失ったグレムリンの腕がだらりと地面に垂れ、持っていた銃を取り落とす。それと同時に正面のグレムリンが閃光を受け、ゆっくりとこちらに倒れ込んできた。それを左腕で受け止めながら、さっきの攻撃で振り上がった右の刀で、腕を斬ったグレムリンを袈裟に斬り下ろした。

「これで四人！」

正面……右に飛ぶ前に左側に立っていたグレムリンの半分くらいが青白い剣を構えてこちらに走っている。

左手で受け止めていたグレムリンをはねのけると、右腕を後ろに伸ばし、左刀を私の右肩から後ろに流すように構えた。そしてブースターを使って前に跳躍しながらグレムリンとの距離を詰める。

「行けっ五人目」

体を左に半回転させながら、後ろで溜めてた右腕を思いきり前へ回転させ、遠心力で正面のグレムリンを風ぎ払う……と、右手で風いだ刀をグレムリンが剣で受け止めた。右手から腕にかけて電気が流れたような痛みが走り、思わず右手で握っていた刀を取り落とした。

「しまった」

バランスを崩して足下がふらついたところを、さっき刀を受け止めたグレムリンが正面から私の胸めがけて剣で貫いた。

「うっ」

胸に焼けるような痛みが走り、私の視界は赤く染まる。全身がゆっくりと後ろに倒れ、視界には空が広がった。

「そこまでっ」

睦月の言葉が耳に聞こえ、グレムリンの手から青白い光が消失する。

視界はゆっくりと元の色に戻り、私を見下ろす無機質なグレムリンの表情の向こうに青空が映った。

「はぁ」

私は頬杖をついてため息をついた。

時間は正午を過ぎ、食堂は混雑のピークに達しようとしている。配膳係は先ほどから忙しく駆け回っており、テーブル席も全て埋まるまでそれほど時間はかからないだろう。本当だったら一足先に食べ終えた私が席を立つべきなんだろうが、あいにくそんな気分にはなれなかった。

周りのテーブルで談笑している他のチームメンバーを見て、私はもう一度ため息をついた。

私が所属しているこのチームはエインセルの中でも特別な存在だ。

クエーサープロジェクト。全身に特別な強化を施し、普通のエインセル達が運用できないような強力な兵器を使い、圧倒的な力をもって相手を殲滅する。

こんなプロジェクトが発足する理由に至ったのは、つい一年前の出来事にまでさかのぼる。人類の土地で突如発生したエインセルの暴走事件だ。すぐにここディオスクロイ島から戦闘班が出動し、現地にいたエインセルも必死に暴走した二人を止めるよう全力を尽くした。しかし人命を最優先に行動した結果防戦を強いられ、多くのエインセルが人々の身代わりとなって命を落とした。そのためエインセル達が人々を守っている間、攻撃に専念するための特殊部隊が結成される事になったのだ。そしてそれが私たちなのである。

元々私たちは惑星のなかでも過酷な環境下における探査を主任務とするプロジェクトだったはずだった。しかし過酷な環境でデータを収集するために全身に

改造を施しているという部分がどうも保安庁の上層部にヒットしたらしく、特殊部隊として大きく方向転換をする羽目になってしまった。とこのプロジェクトリーダーを務める睦月から聞いた。

そんなプロジェクトの中で、私の装備は二本の刀と補助ブースター、それに前線まで突っ込むためのバーニヤと小型の主翼くらいなものだ。他のチームメンバーと違ってパワーアシストも補助アームも重たい遠距離兵器も持っていない。数日前に丸一日掛けて行われた動作試験では補助ブースターの調整誤りでその次のステップである戦闘試験にこそたどり着けなかったものの、私自身の動きについては全く問題なかった。そして試験で不調だったブースターの調整は徐々に完成に向かってきている。本当だったら調整が終わり次第誰よりも早く現場に出るようになってもいいくらいなのだ。あとは……。

もう何度目かも分からないため息をつく。他のメンバーよりも装備の少ない私が、こんなところで二の足を踏んでるわけにはいかない。

「調子悪そうだな」

見上げると、亀ちゃんこと文月が向かいのテーブルにトレーを置いた。

クエーサープロジェクトでは、リーダーの睦月から順番に如月、弥生……霜月、師走とコードネームが割り振られており、プロジェクト内ではこの名前呼び合うことになっている。でも私はそれが何となく性に合わなくて、みんなにあだ名をつけて呼んでいた。

亀ちゃんというのは私がつけたあだ名で、初めて会ってから実に二週間のリサーチを経て名付けたものだ。

亀というのは何も彼女の装備が重装備なだけじゃない。真面目でしっかり者、多少のことでは動じないが、その反面内面は案外打たれ弱い性格による。自分で言うのもなんだけど、なかなか良いネーミングだと思う。あだ名をつけられたみんなからの仕返しなのか何なのか、みんなは私のことをペリカンと呼んでいるようだけど。

「卯月がランチを残すなんて……本当に大丈夫なのか？」

亀ちゃんが驚いた顔で顔を覗き込んできた。お皿の上には冷たくなったスパゲッティが半分以上残っている。

私はテーブルの上に腕を寝かせ、その上にあごを乗せた。

今日はパンケーキか。

亀ちゃんは機嫌が良いときによく昼食に好物のパンケーキをつける。今日は良いことがあったみたいだ。

「最近訓練が上手くいかないのよ」

訓練をする度にどんどんグレムリンの撃破数が落ち込んでる気がする。前は十体全員倒せたのに、今は五、六体が精々といったところ。今朝は四体しか倒せ

なかったし。

なんだか出口のないトンネルを、前も後ろも分からないまま手探りで歩いているみたいだった。自分が上達しているという証拠が全く見えてこない。それどころかどんどん下手になってるんじゃないだろうか。

もちろん、私の訓練や整備の進捗状況に合わせてグレムリンの強さも上方修正がされている。撃破数が減るのは当然だとみんなは言うけど、内心はやっぱりショックだ。全員倒した方が良いに決まってる。

亀ちゃんはおごに手を当てると、思い出すように上を向いて言った。

「これはクヴァレからの受け売りだが、スランプは自分の判断力の上達や目標の向上に身体や技術の上達が追い付いてない状態のことを言うそうだ。今は苦しくてもかならず身体が追い付いて伸びる時期が来る。それまでの辛抱だ」
そんなこと言ったって。その辛抱がいつ終わるか分からないじゃない。

私の爺ちゃんは剣の名手で、一線を退いたあとも保安庁の人たちに剣の指南をしていた。小さい頃は私もその人たちに混じってチャンバラごっこをして遊んだものだ。

そんな日々を過ごし私が十二歳になったあるとき、爺ちゃんは私に剣を振るうこととはどういうことかを聞いてきた。後から聞いた話だけど、このとき爺ちゃんは私を後継者にするかどうかを真剣に見極めようとしていたらしい。

「そんなの簡単よ、相手をぶっ殺すためでしょ！」

……自信満々に答えた私を見て爺ちゃんは私に剣を教えるのを諦めたそうだ。あれから八年が経ち、少しは大人になった今ではさすがに過激な言い方だったと反省はしている。でもその考え方自体は変わっていない。剣術だけじゃない、武術は相手を無力化するための技術だ。爺ちゃんがよく口にした『活人剣』なんて言葉を聞いたって私には言葉の意味が分からないし、剣で人を活かすというのは矛盾してると思う。

結局私は独学で剣術を勉強し、用心棒役として惑星探査課に入った。プロジェクトの方向が変わってからは唯一の近距離型として今は斬り込み隊長のような役割に落ち着いている。

私は食堂を出て、研究庁の惑星探査課にあてがわれた建物の目の前にある自然公園を歩いていた。何となく気が沈んだり、落ち込んだ時はここに来て海を眺めるようになっていた。

「斬り込み隊長がスランプじゃ格好がつかないわね」

そう海に向かって呟く。私の独り言に返事をするように潮風が私の髪を梳いた。武術の道を進むのならば、相手を無力化する為の技術を磨くべきだ。

「亀ちゃんの言う通りだわ、思っていた動きに身体がついてこないなら、動く

ようにがむしゃらにやってみるしかないのよ」

午後、もう一度同じ訓練がある。要はそこで結果を出せばいいのよ！

「用意……はじめっ」

「よし、三十秒で決めてやるわっ」

そう言い放ち、まだレーダーにすら映っていないグレムリンめがけて全力疾走する。

「アリシア、三十秒で十体はさすがに無理だと思うわ」

私の整備担当であるケイティの声は聞こえないふりをして一、二の三で飛び上がり、バーニヤと主翼で地面すれすれを急加速する。

早々に二刀を取り出すと、クワガタの角のように前方へ構えた。前進を利用して思いきり貫いてやる作戦だ。

グレムリンは程なくして視界に入ったが、バーニヤのパージをせずにそのまま突っ込んでいく。

「アリシア、危険よ。今すぐパージして」

ケイティの声が聞こえるが、気にせずにそのまま正面のグレムリンに『針路』を合わせた。

「さあ、覚悟しなさい」

そう言うと二刀を握り直す。

正面に立っているグレムリンめがけて思いきり左刀を突き立てると、グレムリンは左に身をよじって回避した。

外れたっ。すぐに左翼に衝撃が走る。回避したグレムリンが翼に直撃したのだ。

その衝撃で大きくバランスを崩し、身体が不自然に浮きあがる。

機体が垂直に傾き、右の主翼が地面に擦れようとしていた。

「アリシアっ！」

「仕方ないわね」

すぐに主翼とバーニヤを切り離す。そのまま空中で身体を捻って奥にいるグレムリンの方向を向くと、両足で踏ん張って着地した。

まあ良いわ、すぐに全滅させてみせる。そう思って両刀を構え直したところで、左刀がないことに気がついた。

さっきの衝撃で取り落としたか、慌てて周囲を見渡すけどそれらしいものは落ちてなかった。仮想剣と言えど実態はただの筒だ、翼と一緒に転がって行ってしまったのか。

最悪だ、翼をつけたまま飛び込まなければこんなことにはならなかったのに。

やむ無く刀を八双に構える。こうなったら一本で全員倒すしかない。

レーダー上の赤い点が自分の回りに集まってきている。囲まれる前に突破口を

開かなきゃまた負けてしまう。

私は最寄りのグレムリンに向かって駆け出した。一対一ならこっちに分がある、まずは各個撃破で包囲を突破するのが先決だ。

「アリシアっ、いったん退きなさい！」

「はああああ！」

剣を上段に振り上げ、声を上げながらグレムリンに斬りかかろうとした矢先、午前中に感じた右腕の痛みがフラッシュバックした。さっきは上から斬り下ろした刀を止められて衝撃で刀を取り落としたんだった。とっさに腕を回し、刀で後ろ方向に円弧を描きながら下へと刀を持ってくると、両手で斬り上げる。相手は剣を脇に構えて剣先を後ろに流している。剣の長さを測りかねていると、私より一瞬早く剣を水平に払ってきた。

「なっ」

思ったよりも長い剣だった。防御するのもままならないまま私と相手は交差する。

すぐに両腕と胴に激痛が走り、そのまま次の一步で体がぐらりと傾いて地面に倒れ込んだ。走った時の勢いで地面の上を二回ほど転がり回ると、ようやく仰向けに止まった。

ああ、今回も青空が赤い……。

「卯月、ケガはないか？」

戦闘訓練が終わり、控え室に座っていると、二人分のカップを持った睦月が向かいの席に座った。

その一個を私に差し出してくる。けれどカップに手は伸びなかった。

午後の戦績は一体だった。その一体も翼との接触で物理的に破損してしまったため「私が倒した記録」はゼロに等しい。

主翼も大破し、ケイティからはこっぴどと怒られ、散々足る結果だった。

「ケガなんてないわよ！」

強がってそう答えたつもりが、思ったより感情的になってしまい言葉尻が上がってしまった。

まずい、と思ったときにはすでにぼろぼろと涙がこぼれ落ちていた。どうしてこんなことになってしまったのだろう。

「……ねえ睦月教えて、私のどこが悪かったの？」

次から次へと流れる涙を拭って、嗚咽が漏れないようにしっかり喉の奥を引き絞って、すがるように睦月に問いかけた。もう自分一人じゃどうにもできないくらい心は落ち込んでいた。

睦月は一瞬言いよどんだが、意を決して口を開いた。

「卯月の剣には戦術がない。全力でグレムリンに突っ込んだあとは好き放題に暴れているだけに見えた。刀の使い方も大味で、斬ると言うよりは角材で殴ってるようだ。刀の性能と持ち前の高い反射神経だけで斬っているから相手が強くなると対応できずなすがままにされてしまう。技術を磨き、戦術を見極めることで改善すればもっと強くなるだろう」

睦月のアドバイスはいつだって的確だ。かなり辛口な意見だったが、今の私にはどんなアドバイスだってありがたい。

「……取り乱してごめんなさい、もう大丈夫よ」

「焦る気持ちは分かるが、あんまり無理をするなよ」

「ありがとう」

そう答えると、涙を拭いて席を立った。

まだ直すべき点はたくさんあるのだから、投げ出すには早い。

「アリシア、そろそろ休んだ方が……」

「いいえ、まだいけるわっ」

翌日。主翼が使えなくなったので、仮想訓練所にこもってひたすらに訓練を繰り返す。昨日のような実際のフィールドを使うのではなく、専用の小部屋に入って行う仮装訓練室にいた。

五十メートル四方の建物のなかで、専用のゴーグルをつけて次々に湧いて出るバーチャルの敵を倒していく。

昨日睦月が言っていた大味の剣捌きが無くなるまでやるつもりだった。

しかし長年のクセはなかなか抜けない。やり方を変えるとそれが定着するまではしばらくは下手になってしまう。けれど結果を上げたいと思うとこれまでのやり方と新しいやり方とで体がちや混ぜになって剣が迷いだす。

こんなボロボロの状態じゃチャンバラしても楽しくない。正直刀を持ってるだけでも辛かった。今すぐにでも投げ出したい。でも、ここで投げ出したら本当にダメになってしまう、上達への道が閉ざされてしまうんじゃないかと思うと怖くて刀を置けなかった。

せめて何か一つ成果が出るまで、何か一つ手応えを感じることが出来るまで。手が擦りきれて痛い。腕が重くて刀が思うように振れない。そのせいでどんどん成果は落ちていく。

敵の撃った弾が肩に当たった。昨日の訓練と違って痛みはないが、視界の中央にダメージと表示されて敵の動きが止まる。

悔しい、上手くなりたい、自分に負けたくない。でもどうすればいいのか分からない。このまま苦しい練習を続けるしかないのだろうか。私はどうしてここまでして剣を握ってるんだろう

「もう、どうすればいいのよ！」

「もうやめやめ、ストップ！」

その声と同時に周囲の風景や敵が消えて、戦場はただの部屋に戻る。

「ちょっとケイティ、何するのよ」

ガラス張りの観察室の扉を開いてケイティが出てきた。

「カッカしすぎよ、それにそんなに身体をいじめたところで逆効果だわ。今日は休んで頭を冷やしなさい」

「うう」

何も言い返すことができなかった。確かにこのまま続けても成果はない。余計苦しくなるだけなのはわかりきっていた。

「自己ベストなんて滅多に出るものじゃないわ、調子がいいときの記憶があるからそれと比べて落ち込んでしまうのよ」

「毎日こんなに練習してるんだもの、日々上達してなきゃ嘘よ」

ケイティはふうっとため息をつくど、両手を腰に当てて言った。

「アリシア、あなたは一体何と戦ってるのよ」

「自分よ、自分を越えなきゃ強くなれないわ」

「だったらなおさら身体を万全に整えなきゃ。自分にまでやられてちゃ世話ないわよ」

「ぐっ、言ってくれるじゃない」

これ以上ケイティに言い返す言葉が思いつかなかった。

がっくり肩を落として観察室に入ると亀ちゃんが立っていた。……って、亀ちゃんに見られた！？

みんなの前では余裕綽々の卯月でいたいのに。こんなに苦しんでるところを見られるなんて屈辱だわ。亀ちゃんは私の顔を見ると、なぜかしょんぼりしたような表情で言った。

「そんなに苦戦してるとは思わなかったんだ」

何とか取り繕わなければ。

「な、何のことかしら？」

「全部見てた。ケイティとの喧嘩も」

「そう……」

見られてたなら仕方がない。

それに今の私は無理に取り繕って何とかなるような状態でもなかった。

手のひらは擦りおけて髪もボサボサに乱れきっている。この状態のどこに余裕があるのか。

「そういう亀ちゃんはどうなのよ、昨日はずいぶん機嫌が良かったみたいだけ

ど」

「ダメだった、今日は私も不調だ」

亀ちゃんは弱々しい微笑を浮かべて言った。

「バカよね、こんなになるまで修行に明け暮れるなんて」

そう言いながらケイティが塗り薬の入ったチューブを手渡してきた。それを手に塗るとヒリヒリと痺れるような痛みが手のひらを覆った。

「皮膚の再形成用の薬よ。皮膚を溶かして柔らかくしてから再形成させるものだから痛みがひくまでの間は手を酷使しないように。まあ、アリシアには良い機会よ」

薬を塗った手の上から包帯を丁寧に巻いてくれた。

「さっき見た感想なんだが、一体どこに問題があったんだ？」

「問題ありまくりよ。一対一なら上手くいくかもしれないけど、これが一度に多数を相手にするとすぐに囲まれてやられちゃうんだから」

「一度にたくさんを相手にしようとするから息切れするんじゃないの？」

いつの間にかケイティ、亀ちゃん組と私の二対一になっている。

「わらわら集まってくる敵をどうやって一対一にするのよ。楽に各個撃破する方法があるなら教えて欲しいわ」

「そうだな……突きは鋭くて良かった」

「そうね、アリシアの突きは無敵だし、何よりリーチがあるからすこし離れても詰めよったら負けないわね」

「そんなこと言ったって、今の私には何の慰めにもならないわよ」

「そうじゃなくて」

亀ちゃんは軽口のみで言った私の言葉を遮った。すこし驚いた私が無言になるのを確認すると、ゆっくり口を開いた。

「……あんまり上手くは言えないが、ペリカンのなかには上空から海のなかの魚の様子を窺ったあと、魚をめがけて急降下して狩りをする種がいるらしい。卯月の突きだってそうだ。突っ込んで負けるのなら、すこし距離を取って隙を伺うようにして、隙が見えてから狩りをすれば良いんじゃないか」

はっとした。

そうか、そういう動きもあるんだ。

突きが上手いと思ったことはこれまで一度もなかった。突きを出せばなんとなく上手くいくことが多い。そんな程度の認識だった。

頭のなかに考える動きが何通りも思い浮かんでくる。今すぐにでも試してみたい。

もやもやが晴れそうな気持ちと、ヒリヒリと痛む両手のせいでそれを晴らすことができないもどかしい気持ちが心のなかでくすぶっていた。

「何よ一、亀ちゃんまで私がペリカンだって言いたいなの？」

「す、すまない。つい考えなしに言ってしまった」

ペリカンのように……か。

「でもありがと、少し元気出たわ」

私はすり抜け様に亀ちゃんの肩にポンと手を置いた。その瞬間手がズキリと痛んだ。

「うー痛たた」

「ほら、言ったそばから」

「どうしたんだ、音沙汰もなく数年間居なくなったら突然帰ってきて手合わせをしてほしいなんて」

その晩、久しぶりに実家に帰った。

「まあね、色々と思うところがあるのよ」

ケイティには止められたが、どうしてもアドバイスを試してみたかったのだ。手の痛みはほとんど消えたから大丈夫だろう。

お互いに向き合って竹刀を構える。私は二本、爺ちゃん是一本。

爺ちゃんが足場を探っているうちに、私は思いきり爺ちゃんに打ち込んだ。

バンッ

激しい音が響き渡る。爺ちゃんは両方の竹刀を一本で受け止めていた。

「どうした、二本の刀は飾りか？ もっと手数を打ち込んで来い」

私はとっさに後ろに跳躍した。そのまま爺ちゃんを軸に時計回りに四半周回ると、左手で爺ちゃんに突きを放つ。

爺ちゃんは竹刀を下から上に跳ね上げて私の突きを外すと、振り上げた竹刀を今度は振り下ろして私の手の甲を打った。

「うっ」

手の甲に痛みが走り、竹刀を取り落とした。

「さあ、竹刀を取れ。お前がわしをここへ呼んだ理由を竹刀で語ってみろ」

「もちろんそのつもりよっ」

私は素早く竹刀を取ると、もう一度爺ちゃんに挑んでいく。

激しく打ち合う音が何度も響き、その度に窓ガラスがバリバリと音を立てて揺れる。積極的に打ち込んでいるのは私の方なのに、それを払いのけた爺ちゃんの手が伸びる度に全身を少しずつ竹刀で打たれていった。

ただの突きは通らない。斬り込みんでも止められる。どうすれば爺ちゃんに当てられる？

そのとき亀ちゃんの手が脳裏によぎった。

『上空から様子を伺って、一気に飛び込んで狩りをするそうだ』

そうだ、その手があった。

私はあえて自ら打ち込むのをやめて、爺ちゃんからすこし距離を置く。

左腕をだらりと後方に垂らし、右の竹刀を上段に構えた。爺ちゃんに対して胴を晒す形になる。初めての試みだから失敗して当然、試行錯誤はとりあえずやってからだ。

そのまま一定の距離をおきながら左右にゆらゆらと揺れ動き、爺ちゃんの攻撃を誘う。

爺ちゃんは警戒しているのかなかなか斬り込みんでこなかった。私は自分からいきたいのを必死に我慢して攻撃を待つ。

長い十秒間だった。制止していた爺ちゃんが突然打ち込んできた。鋭い一撃を何とか背後に跳躍して回避する。反応が一瞬遅れてたら勝負は決まっていたかもしれない。

爺ちゃんの竹刀が空を斬ったところで、私は床を蹴った。一気に詰め寄り右の竹刀で上から爺ちゃんを切りつける。

「そこっ」

爺ちゃんはそのをさっき振り下ろした竹刀を構えて受ける。前進し勢いの乗った一撃を受けさせるのが狙いだった。この切り付けはフェイントで、それを受けた隙に左から我慢の突きを繰り出す作戦。案の定爺ちゃんは両手で右刀の一撃を押し止めている。私の目に一瞬の隙がはっきりと写り込んだ。

「はあっ」

爺ちゃんの胸をめがけて左の竹刀で突きを放つ、見事に竹刀が爺ちゃんの胸に突き当たった。竹刀は大きくしなったあと元に戻ろうとし、その衝撃で爺ちゃんは真後ろに吹っ飛んで倒れた。

自分のことながら、一瞬何が起こったのか分からなかった。私の突きが爺ちゃんに当たって、爺ちゃんが床の上に仰向けに倒れている。

「……やった、やったわ！」

だんだんと実感が湧いてきた。爺ちゃんに勝てたのだ。

「……昔から突きだけは上手いな」

そう言うと爺ちゃんはあぐらをかいて座った。私は竹刀を置いて爺ちゃんの正面に座り込んだ。

「自分の利点を活かした一撃は見事だった。ただな、相手に胴を晒すのは感心せん」

「だったらどうすればいいのよ」

「たまに家に帰ってこい、わしがみっちり鍛えてやる……剣術について少しは分かってきたみたいだしな」

そっぽを向いた爺ちゃんの言葉を聞いて頭のなかに閃くものがあった。活人剣

……なるほど、そういうことか。

起き上がった爺ちゃんに、八年かかってようやく思いついた答えをぶつけてみた。

「爺ちゃん、やっと分かったわ。自分が生き残るように注意しながら相手をぶっ殺す技術が活人剣なのねっ！」

どうだ、参ったか！

その言葉に爺ちゃんは大きなため息をついた。

「……じっくり考え直してみろ、まだ時間はあるのだから」

そう言うのと背を向けて道場をあとにしてしまった。

「今度こそ合ってると思ったのに……っくう」

両手のひらがジンジンと痛んだので見てみたら、包帯の上から血がにじんでいた。あちゃー、ケイティが言ったのはこういうことだったのか。

「全くお前ってやつは無茶しやがって。手当てしてやるからついてこい」

爺ちゃんが駆け寄ってきて手首をつかみ。そのまま引っ張られるようにして家のなかに連れられた。

治療を受ける間、爺ちゃんの昔話を少しだけ聞いた。なんと爺ちゃんにも昔何をやっても上手くいかないことがあったらしい。そういった困難を何度も乗り越えて、いつの間にかスランプと上手に付き合うことができるようになったそうだ。

爺ちゃんでも上手くいかないことがあったんだということを知って、なんだか自分がつまらないことで悩んでいたような気がした。

ババババババ

グレムリンの持つアサルトライフルが弾を発射する。私に向かって飛んでくる青い閃光を右に跳躍し避けたあと、グレムリンに向かって駆け出した。

グレムリンとの距離は五十メートルほど、まだ突っ込むには距離が遠い。グレムリンが撃つ弾を右に左に避けながら距離を近づけていく。

このままでは近づく前にやられてしまう。何とか隙を作らなければ私に勝ち目はなさそうだ。

今日の試験には睦月の他、このあと試験場を使う予定の神無ちゃんに来ていた。それと暇なのか亀ちゃんとわんこ、亀ちゃんのパートナーが見に来ている。普段口うるさいケイティも居るはずなのに、さっきから一言も通信が入らないところを見ると、みんなが私の成り行きを見守っているようだった。

グレムリンとの距離が二十メートルを切ったあたりで、もう一度グレムリンが銃を撃った。私はブースターを使ってとっさに左によける。地面を擦る右足がグレムリンを中心に時計回りに半円を描いた。それを追いかけるようにグレム

リンが銃を放つ。

カチッ

銃の弾がきれ、金属が打ち付ける音がした。

「そこっ」

決めるなら今しかない。グレムリンが腰の剣に手をやったのを見て、一気にブラスターで飛び込む。グレムリンの剣を右刀で弾きながら胸元を左刀で突き抜いた。

グレムリンはその場に力なく倒れると、そのまま動かなくなった。

「やった……」

爺ちゃんと手合わせをして二週間後、初めて十体全員抜きを達成することができた。

「やったわ！ さすが私ね」

思わず右手でガッツポーズを取った。とうとう暗雲の立ちこめるスランプ状態を抜けたのだ。ケイティが持っている通信マイクからケイティ達の歓声と拍手の音が聞こえた。

「卯月先輩、お見事でした」

待合室に戻ると、神無ちゃんが出迎えてくれた、

「卯月先輩は、何をやっても上手くいかないときどうやって調子を持ち直しますか？」

神無ちゃんこと神無月は、名前の通り十人目のメンバーで、如月と同じくレールガンを使った長距離射撃を得意としている。真面目でこつこつと調整を行っている神無ちゃんもどうやらここに来て行き詰まっているらしい、普段の神無ちゃんからは想像もつかないような弱り果てた顔をしている。真面目な性格だからこそかなり苦しんでるようだった。

ここは私がアドバイスをしてあげなきゃ。

「まあ、私はあまり苦しまなかったからアドバイスにならないかもしれないけど」

と、一応先手を打っておいてから言葉を続ける。

「まずは周りの人に自分の動きを見てもらって、悪いところと良いところを指摘してもらうのよ。自分で気づかなかった良いところが見つかるかもしれないしね。神無ちゃんだったら狙撃が得意な如月とか亀ちゃんあたりが良いんじゃないかしら」

「如月先輩や文月先輩ですねっ」

「あとはひたすら練習よ！ 私もそれでようやく自分のやり方を見つけられたのよ」

クールな私には珍しく熱のこもったアドバイスになったわね。そう言ったあと

ではっとする。神無月の背後で必死に笑いを堪えている睦月と亀ちゃんが目に写った。

「先輩の経験談、とても参考になりました。ありがとうございます！」

そう言うと背を向けて走り去っていく神無月を目で追いながら、睦月がニヤリと笑って言った。

「剣の腕は確かになったが、会話の方はまだまだだな」